

優しさ

ある日の血圧値、異常に高い。そうだ、あの手紙のせいだ。三年前入院した医大病院の婦長西山淑子さんからの突然のお便りは、それほど感動的であった。

「“灯”にお書きになった“限りなく粗暴”という見出しを見ただけで、すぐ看護婦のことでないかしらと思いました」。

「看護婦職、生と死との出会い、人の心との出会い、この仕事ほどそれを眼のあたりに体験する仕事はない。そして、その瞬間に立ち会えば立ち会うほど、じぶんの無力をひしひしと感ぜさせられます。でも、その瞬間をほんの少しでも共有させてもらえる、このことがこの仕事をやめないでいられる根源ではないかと思えます」。

「ふれあいを大切にするためには、まず言葉づかいから仲間たちと話しあっています。看護婦の仕事を大切にすれば、しぜんにひとを大切にします。看護婦の社会的地位を下げているのは医師でもだれでもない、看護婦じしんです」。その反省は尊い。西山さん、あなたたちのような看護婦であれば、いまそのまま地位と評価は高いの

です。高齢社会に向かうほど、看護婦・保健婦の社会的地位はいよいよ高まらねば、この国は不幸です。

「患者さんの死に立ち会うとき、つくづく自分も死ぬものと思います。それは、今をせいっぱい生きねばという思いにつながります」。

体験でつかんだこの思想は本物だ。

「七階からの裏山の景色は入院なさったところと少しも変わっていません。：七階病棟まで歩いておいで下さい」と結んでいた。救急車でなく元気な姿で、と語りかける。生死の境で日夜眺めていたあの自然にまでふれる心くばり。まことに優しい。優しさとはひとの憂いうれを憂うこと、生やさしいものではない。

(一九八六年十一月十九日)